

外国語教育メディア学会(LET)
第84回 (2014年度秋季)
中部支部研究大会

プログラム

日時：2014年11月22日(土) 9:30-16:45

会場：静岡大学 情報学部

〒432-8011 静岡県浜松市中区城北3-5-1

会場校実行委員長：宮崎 佳典(静岡大学)

会場校実行副委員長：天野 修一(静岡大学)

主催：外国語教育メディア学会(LET)中部支部

後援：静岡県教育委員会、浜松市教育委員会

問い合わせ先：

メール：支部サイト(<http://www.letchubu.net>)の「お問い合わせ」

外国語教育メディア学会(LET)中部支部事務局

〒487-8501 愛知県春日井市松本町1200

中部大学 語学センター 小栗成子研究室

電話：0568-51-6649

Twitter: @LETChubu



日程

9:30 受付 【情報学部2号館2階ロビー】

9:30 展示 【情報学部2号館2階ロビーならびに廊下】

10:00-10:10 **開会行事** 【情報学部2号館/情24教室】

司会：宮崎 佳典 (静岡大学)

主催者挨拶：高橋 美由紀 (中部支部支部長)

開催校挨拶：酒井 三四郎 (静岡大学大学院情報学研究科長)

10:20-11:45 **研究発表**

<第1室>(1)10:20-10:45 (2)10:50-11:15 (3)11:20-11:45 【情22講義室】

司会：杉野 直樹 (立命館大学)

- (1) 英語学習者の読解プロセスにおける構成能力の役割について：眼球運動データをもとに
吉川 りさ (名古屋大学大学院生)
梁 志鋭 (名古屋大学)
- (2) オンラインチャット活動における外国語学習のタスクと産出言語の正確さ
高瀬 奈美 (静岡文化芸術大学)
- (3) 英語母語話者と日本人英語学習者の意味ネットワーク比較
石田 知美 (名古屋大学)

<第2室>(1)10:20-10:45 (2)10:50-11:15 (3)11:20-11:45 【情23講義室】

司会：坂東 貴夫 (金沢学院大学)

- (1) カタカナ語とその同語源語の関係性がL2語彙習得に与える影響：品詞の superset/subset という観点から
松本 広美 (名古屋大学大学院生)
- (2) マウス軌跡に含まれる英単語並べ替え問題解答時の迷いの分析
宮本 隆 (静岡大学)
宮崎 佳典 (静岡大学)
厨子 光政 (静岡大学)
法月 健 (静岡産業大学)
- (3) Validation of the Grammatical Carefulness Scale Using a Discourse Completion Task and a Reading and Underlining Task
田村 祐 (名古屋大学大学院生)
草薙 邦広 (名古屋大学大学院生・日本学術振興会特別研究員)

<第3室>(1)10:20-10:45 (2)10:50-11:15 (3)11:20-11:45 【情24講義室】

司会：石川 有香 (名古屋工業大学)

- (1) ニュージーランド体験型海外研修プログラムの検証：テキストマイニングによる研修日誌の解析
鈴木 薫 (名古屋学芸大学短期大学部)

- (2) チャンク情報を考慮した例示型英文書作成支援ツール
戸沢 信晴 (静岡大学)
宮崎 佳典 (静岡大学)
田中 省作 (立命館大学)
- (3) スマホ・PC向け多言語対応語彙教材作成・配信システムの開発
古泉 隆 (名古屋大学)

〈第4室〉(1)10:20-10:45 (2)10:50-11:15 (3)11:20-11:45 【情25 講義室】

司会：天野 修一 (静岡大学)

- (1) Elementary School Children's Musical Aptitude and Productive/Receptive Prosody of English
田畑 恵 (名古屋大学大学院生)
- (2) 小学校教員を目指す大学生の異文化に対する態度に関する調査：異文化コンピテンスを育成するカリキュラム開発を目指して
石井 英里子 (東海大学)
長田 恵理 (國學院大學)
- (3) 小学校英語教育字における文字指導の現状と将来の展望
高橋 美由紀 (愛知教育大学)
柳 善和 (名古屋学院大学)

11:55-13:30 ランチタイムシンポジウム 【情報学部2号館/情24 教室】

英語教育のICTの効果的な活用
～小学校英語教育から、中高の英語教育への連携～
コーディネータ：伊藤 佳貴 (大同大学大同高等学校)

「ICTを授業に有効に活用するために」

パネリスト：伊藤 佳貴 (大同大学大同高等学校)

高等学校の英語教育では、中学校における学習の基礎を土台に、四技能「聞く」「読む」「話す」「書く」の言語活動を統合的に行うことが求められている。しかしながら、実際の授業を見ると、大学入試に大きく関わる「読むこと」「聞くこと」の指導に重点が置かれてしまい、「書くこと」「話すこと」の活動については、量的に不足している現状がある。

発表者は、この課題を克服する一手段として、インターネットを活用した授業実践をしている。具体的には、ライティングの指導ではフォーラムや電子メールを活用した学習活動を、スピーキングの指導ではスカイプやYouTubeを活用した学習活動を、それぞれ行っている。発表では、これらの活動事例を紹介しながら、インターネットを活用する利点や、活動を通して得られた成果、またインターネット活用における課題などについて報告する。

「授業デザインソフトとタブレットを使用したインタラクティブな外国語活動」

パネリスト：池田 勝久 (静岡県浜松市立北小学校)

本格的に始動した外国語活動ではあるが、現場では未だ多くの課題が存在している。特に教師が抱える授業づくりの負担や不安は大きく、授業計画や指導案づくり、教材研究、英語力の不安等から、国から配付されているHi, friends! 頼みの授業になっている現状がある。小学校での外国語活動では、子どもたちが実感をもって外国語と

触れ合うことが大切なため、地域や子どもの実態に合わせて教師がひと工夫した教材を使うことによって学びの質も大きく高まる。教材づくりのアイデアやノウハウを磨き、それを生かした授業づくりに取り組んでいる教師もいるが、時間的な制約で思いを形にできない現状がある。そこで、授業計画や指導を支援してくれるツールとして外国語活動授業デザインソフト「ジャストマイスター」の活用とメーリングリストを使った共同教材開発とデータの共有化についての実践を紹介したい。また、協働学習支援ツール「X Sync」を活用することで、協働で話し合う時間を大切にしたい児童主体の外国語活動の授業づくりについても紹介する。

「外国の言語や文化について関心を高めるための ICT の活用とその効果」

—小5 外国語活動 「いろいろな衣装を知ろう」の実践から—

パネリスト：古橋 孝文（静岡県浜松市立東小学校）

「日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方に気付くこと」の指導の充実を図るためには、日本の文化を含めたさまざまな国や地域の生活、習慣、行事などを積極的に取り上げていくことが大切である。しかし、児童は、見たこともない世界の文化を「英語ノート」のイラストや写真、学級担任の不慣れた英語による話などから文化について知ることになり、十分な理解につながらないのではないかと考えた。そこで、児童の実態に応じた映像や音声といった教材を担当が十分吟味して選び、その映像や音声を活動のタイミングに合わせて大きく映して提示したり、提示した映像を指しながら発問、指示や説明をしたりすることが重要ではないかと考えた。

本研究では、外国語活動に ICT を活用した取り組みをしていくことが、外国の文化について関心を高めることにつながるのではないかと考え検証をした。

「ICT機器を効果的に活用した授業実践とその課題」

パネリスト：安藤 翔太（愛知県岡崎市立甲山中学校）

6年後に東京オリンピックを控え、中学校の英語教育でも All English による授業が望ましいとされつつある近年。学習指導要領には、『外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。』とあるが、実際の現場では教科書を進めることや受験に向けての英語を教えることに重きが置かれている状況である。【積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成】というところの本質には至っていないように感じる。近年の ICT 機器の発達には目を見張るものがあり、教育にも大きな効果を上げられるであろうものがたくさん存在する。中でも、子どもたちの目を引く教材や、世界中のどこでもだれでも簡単につながることのできるインターネット、そしてそれらの人と会話することのできるアプリケーションには、大きな可能性を感じる。今回、教科書本文の内容を学習する際のデジタル教科書や文型練習の際のパワーポイントの使用例、実際に海外にいる人と skype を使ってスピーキングを行う活動の実践例などを紹介する。これらの活動事例を紹介しながら、それぞれの利点や活動を通して見られた成果、またこれからの課題について報告する

13:40-15:05 研究発表・実践報告・ミニ講座等

<第 1 室>(4)13:40-14:05 (5)14:10-14:35 (6)14:40-15:05 【情 22 講義室】

司会：法月 健（静岡産業大学）

(4) Corpus-Based 分析法による英語学習者の読解プロセスの解明：読解時の眼球運動データのコーパス化に向けて

梁 志鋭（名古屋大学）

阿部 大輔（名古屋大学大学院生）

(5) Video and Blog activity in network-based language teaching (NBLT) CALL classrooms to promote oral communication skills and critical thinking skills

中川 浩（東海大学）

- (6) 聴覚障害者英語教育における情報端末の活用
鈴木 薫 (名古屋学芸大学短期大学部)

＜第2室＞(4)13:40-14:05 (5)14:10-14:35 (6)14:40-15:05 【情23 講義室】

司会：尾関 修治 (名古屋大学)

- (4) 文中におけるコロケーションの処理に対するL1の影響：EFL学習者に対する自己ペース読み課題による検討
西村 嘉人 (名古屋大学大学院生)
福田 純也 (名古屋大学大学院生・日本学術振興会特別研究員)
- (5) 大学生の英語学習における学習動機と学習方略
坂 望美 (中部大学)
- (6) 英語スピーキングに対する抵抗感を軽減する試み：タスクを用いた英語授業の実践報告
福田 純也 (名古屋大学大学院生・日本学術振興会特別研究員)

＜第3室＞(4)13:40-14:05 (5)14:10-14:35 (6)14:40-15:05 【情24 講義室】

司会：宮崎 佳典 (静岡大学)

- (4) 高校英語の授業用アプリ開発と授業実践：新学習指導要領に対応した開発上の工夫と使用法
杉山 潔実 (静岡県立藤枝西高等学校)
- (5) 校種間におけるコンピュータ支援語学学習態度の変容：中学生・高校生・大学生を対象とした多母集団の同時分析を用いて
川口 勇作 (名古屋大学大学院生)
草薙 邦広 (名古屋大学大学院生・日本学術振興会特別研究員)
- (6) From building the system to improving pedagogy: Creating a university-wide e-learning system
Adam Jenkins (静岡理工科大学)

＜第4室＞(4)13:40-14:05 (5)14:10-14:35 (6)14:40-15:05 【情25 講義室】

司会：石井 英里子 (東海大学)

- (4) 〈ミニ講座〉 Use of technology in British School
Daniel Barker (浜松市ALT(JET))
- (5) 中国の大学における英語教育の現状：中国の大学における英語教育の現状
市川 研 (香川高等専門学校)
- (6) 留学生自身による成長型教材の開発
矢島 邦昭 (仙台高等専門学校)

15:15-16:45 **講演**

【情報学部2号館/情24 教室】

「脳機能にもとづいた言語の発達と学習のメカニズム」

講師：荻原裕子 (首都大学東京)

講師紹介：高橋美由紀 (愛知教育大学)

言語を獲得していく時期やそのプロセスは、母語では言語の違いに関わらず共通していますが、第二言語や外国語の場合は、学習開始年齢、習熟度、接触量、学習環境、教授法など、さまざまな要因が絡んでいて複雑です。本講演では、最近の脳科学の知見をもとに脳の発達の様子を概観した後、公教育がはじまる7歳以降に日本人が英語を習得する過程について、演者が過去8年間に渡って行った言語習得の大規模コホート調査について紹介いたします。音声、単語、文法の習得や脳活動にみられる男の子と女の子の違いなどを取り上げます。発達途中の子供の脳の中で外国語がどのように処理されているのかを把握した上で、より効果的な学習方法の可能性について検討いたします。

17:00-18:30 **懇親会**

【生協北館1階食堂】

• • • • •

研究発表概要

<第1室>

発表1 英語学習者の読解プロセスにおける構成能力の役割について：眼球運動データをもとに

吉川 りさ (名古屋大学大学院生)

梁 志鋭 (名古屋大学)

従来の第二言語読解研究における読解コンポーネントアプローチでは、読解能力間の関連は扱っているものの (Jeon & Yamashita, 2014)、読解プロセスと読み手の能力の関係は観察できない。一方、第一言語読解研究においては、Kuperman and Van Dyke (2011) が、読解構成能力と読解プロセスの関連を眼球運動計測を用いて調査し、下位レベルの処理能力 (Rapid Automated Naming: RAN) が読み手の読解時の眼球運動を最も予測すると報告している。

これを背景に本研究は、47名の日本人英語学習者の語彙知識とRANを測定し、英文読解時の眼球運動との関連を調べた。そして、1) 語彙知識のみが複数の眼球運動測定値を予測すること、2) 語彙知識とRANとの交互作用から、両タスクで高得点の学習者は、サッカーボール距離と、単語の読み飛ばし率が高いことが判明した。上記の結果から、英語学習者の読解時の眼球運動を予測する要因は語彙知識であるが、RANで測る下位レベルの処理能力も読解を支える重要な要因であることが示唆された。

発表2 オンラインチャット活動における外国語学習のタスクと産出言語の正確さ

高瀬 奈美 (静岡文化芸術大学)

教育におけるICTの利活用が提唱されているが、実際にオンラインでの学習活動と対面活動を比較し効果を測定した研究は少ない。オンラインチャット活動には、アウトプットを促す利点(Blake, 2000; Kitade, 2000; Lai & Zhao, 2006)があり、self-initiated self-repairのrecast (言い直し)が多いとされている(Tudini, 2005)。しかし、これまでの研究ではタスクの認知負荷が産出言語に与える影響について研究されていない。

本研究は、大学英語授業でのオンラインチャット活動と対面活動において認知負荷の違う3種類のタスクを課し、タスクごとの発話記録やログから正確さとrepairの種類と数を比較した。発表では、オンラインチャット活動と対面活動を比較し、産出言語の正確さと、言語習得のきっかけになるrepair数について発表する。また、オンラインチャットと対面活動におけるタイプ別タスク活動の産出言語の特徴と要因について考察し、オンラインチャットにおける認知負荷別タスクのrepairが正確さに及ぼす可能性を議論する。

発表 3 英語母語話者と日本人英語学習者の意味ネットワーク比較

石田 知美 (名古屋大学)

メンタルレキシコンの中で語彙項目は意味ネットワークで結びつけられ、語彙項目間の相互関係にもとついて意味概念が規定されていると指摘されている(門田, 2002)。本研究は、L1 と L2 のメンタルレキシコンにおける意味ネットワークを比較するために、綴りは1 つで互いに関連のない複数の意味を持つ homographs の語彙連想調査を行った結果を報告する。

語彙連想調査には英語母語話者 11 名と日本人英語学習者 31 名が参加し、両グループの調査参加者は、homographs を見て、頭の中で浮かんだ語を思いついた順番に紙面に書くように指示された。

その結果、L2 メンタルレキシコンは、L1 メンタルレキシコンを媒体として、概念と結びついていることが示唆され、英語母語話者と日本人英語学習者の意味ネットワークにおいて、homographs から一番目に連想する意味(第一義)と二番目に連想する意味(第二義)が異なる連想刺激語があり、両グループの第一義に関する相関は中程度であることが明らかになった。

発表 4 Corpus-Based 分析法による英語学習者の読解プロセスの解明：読解時の眼球運動データのコーパス化に向けて

梁 志鋭 (名古屋大学)

阿部 大輔 (名古屋大学大学院生)

読解プロセスの解明に有効な手段である眼球運動計測の実験は、言語刺激の特性を厳密に統制・操作する要因計画と、厳密な統制を行わずに読解時の眼球運動と言語的特性の関連を調べる Corpus-Based 分析法に大別される(Rayner, 2009)。代表的な読解時の眼球運動データのコーパスは、Dundee Corpus が挙げられる(Kennedy & Pynte, 2005)。

本研究は、第 2 言語の読解研究では研究例が少ない Corpus-Based 分析法の有用性について、日本人英語学習者 48 名の英文読解時の眼球運動データと、言語的特性一語長と頻度、文脈の予測度一の関連を一例に調査した。予測度については、コーパス(BNC)に基づいた、“Surprisal”(Hale, 2001)の計算結果を利用した。

線形混合モデルを用いて分析したところ、日本人英語学習者は、3つの言語的特性にも敏感であることが判明した。これは、Corpus-Based 分析法は第二言語の読解時にも有用であることを示す。本発表では、読解時の眼球運動データをコーパス化する利点と今後の読解研究への応用性を議論する。

発表 5 Video and Blog activity in network-based language teaching (NBLT) CALL classrooms to promote oral communication skills and critical thinking skills

中川 浩 (東海大学)

The use of technologies in EFL classrooms has become essential and many EFL teachers are demanding to learn about different types of technology being utilized in academic contexts. One of the goals in the Foreign Language Center at Tokai University is for students to be able to discuss academic topics in groups. This presentation will demonstrate how the presenter uses a Vlog activity to help students improve oral skills and interact successfully in this context. The presenter will highlight a teacher's role, provide tips to help students utilize moral lessons from the video in discussions, and recommend skills to enhance students' oral skills.

発表 6 聴覚障害者英語教育における情報端末の活用

鈴木 薫 (名古屋学芸大学短期大学部)

聴覚障害者にとって英語学習は多くの困難を伴う。現在、特別支援学校では人工内耳を利用する者が増加しているが、補聴器を利用する者も多く在籍する状況にあり、情報保障の形態が個々の生徒によって異なるため、通常形式の授業よりも ICT を活用した個別指導が効果的であることが想定できる。実際、ICT は様々な方法によって特別支援教育の現場で導入され、最近では、パソコンよりも手軽に利用できる iPad などの情報端末を授業において利用している学校が増えている。本研究では、ニュージージーランドのケルストーン小学校の聴覚障害ユニットで取材した活用事例と、愛知県立豊橋聾学校で実施している活用事例を

紹介する。さらに、これまでの研究調査で明らかとなっている聴覚障害の特別支援教育における問題点を取り上げ、情報端末を活用した解決策について検討する。授業見学や教員からの聴き取り調査の分析結果から、改善のための活用法を提示する。

<第2室>

発表1 カタカナ語とその同語源語の関係性がL2 語彙習得に与える影響：品詞の superset/subset という観点から

松本 広美 (名古屋大学大学院生)

英語を語源とするカタカナ語が、日本人英語学習者および英語を母語とする日本語学習者のL2 語彙習得にどのような影響を与えているかを調査した。カタカナ語とその同語源語である英単語の関係を、品詞の superset/subset という観点から、J>E (日：名詞&動詞、英：動詞のみ。「シュート(する)」と”shoot”など)、J=E (日英とも名詞&動詞の用法あり。「テスト(する)」と”test”など)、J<E (日：名詞のみ、英：名詞&動詞。「リスク」と”risk”など) という3つのグループに分け、文法性判断テストを行った。英語学習者、日本語学習者とも、初・中級者においてはL1 の影響による過剰般化・過少般化が見られたが、熟達度が上がるにつれL1 の影響を克服する傾向にあった。カタカナ語は日英どちらの学習者のL2 習得にも影響を与えており、L2 指導における肯定証拠や否定証拠の必要性を示唆する結果となった。

発表2 マウス軌跡に含まれる英単語並べ替え問題解答時の迷いの分析

宮本 隆 (静岡大学)

宮崎佳典 (静岡大学)

厨子光政 (静岡大学)

法月 健 (静岡産業大学)

本研究は、英単語並べ替え問題の解答時のマウス軌跡情報をはじめとした履歴情報に着目し、解答時に発生する「迷い」を推定するモジュールの開発を目的とする。履歴データごとにマウス軌跡にかかわる各種パラメータを比較し、迷いが発生している可能性が高い履歴データを抽出することに加え、履歴データ内における迷いの発生箇所の特特定化を目指す。これにより、教師および学習者が解答した問題に対する学習者自身の理解度をより正確に把握することが可能となることが期待される。以前行った少人数のパイロット実験では個別にヒアリングを行い実際の迷いとこの比較を行ったが、ヒアリング実施は大人数授業では現実的ではない。そこで我々は今回、迷いの発生箇所を解答の都度、オンラインで入力させる機能を追加した。本研究では、英語教育の現場でこのツールを用いた実験を行い、迷いの発生箇所の推定能力に関する分析を行った。

発表3 Validation of the Grammatical Carefulness Scale Using a Discourse Completion Task and a Reading and Underlining Task

田村 祐 (名古屋大学大学院生)

草薙 邦広 (名古屋大学大学院生・日本学術振興会特別研究員)

This study attempted to confirm the validity of Foreign Language Grammatical Carefulness Scale (FLGCS) developed by Kusanagi et al (2014). Grammatical Carefulness by definition is a personal trait which reflects learners' behavior and belief in language use. Although the factorial and convergent validity of the FLGCS was supported by the factor analysis, it is still necessary to investigate how FLGCS and learners' performance are correlated. Therefore, the present study conducted two types of task; a discourse completion task (DCT) measuring pragmatic performance, and a reading and underlining task (RUT) gauging learners' ability to detect lexical or syntactic anomalies. It is hypothesized that the scores of pragmatic and lexical-syntactic carefulness in the FLGCS are correlated to the learners' performance in DCT and RUT respectively. The results and possible explanation for them will be discussed in the presentation.

発表4 文中におけるコロケーションの処理に対するL1の影響：EFL学習者に対する自己ペース読み課題による検討

西村 嘉人 (名古屋大学大学院)

福田 純也 (名古屋大学大学院生・日本学術振興会特別研究員)

第二言語習得研究の分野において、L1とL2で直訳が一致するコロケーション(e.g., 強い風→strong wind)と一致しないコロケーション(e.g., 強い雨→heavy rain)を対象とした研究が行われてきている。そこでは、フレーズ性判断課題やプライミング課題の結果から、前者の方が後者より容易に習得されることを示している。これまでコロケーション習得の有用性として強調されてきた「コロケーションは言語使用時の認知的負荷を緩和する」という観点から見ると、実際に習得されたコロケーションが言語使用時にそのような機能を持つか検証する必要があるが、意味中心の読解を行う際に個々のコロケーションにどの程度認知的資源を割いているかは定かではなく、文読解時に学習者がコロケーションに敏感でないことを示唆する研究もある。本研究では、日本語を第一言語とする英語学習者に対して自己ペース読み課題を行い、L1とL2が一致する条件(CC)と一致しない条件(IC)間の反応時間を比較した。結果として、CCはICと比較してコロケーション読解時の負荷が小さいことが示され、文中における処理の観点からもコロケーション使用の認知的な有用性が示唆された。

発表5 大学生の英語学習における学習動機と学習方略

坂 望美 (中部大学)

教育活動において、学習者の学ぶ意欲やその学習方法は学習の成否に大きく関わるものと考えられる。堀野・市川(1997)は高校生の英単語学習に関して、学習動機を6種類に分類し、学習動機と学習方略との関連を調査した。6種類の学習動機を因子分析した結果、学習内容を重視した動機と軽視した動機にグルーピングされ、学習内容を重視した群のみが、テスト成績への有効性が示される方略(体制化方略)を使用していることが示された。

本研究の目的は、日本人大学生の学習動機と学習方略を調査し、それぞれの構造と関連を堀野・市川(1997)の「高校生の学習動機・学習方略・学業成績の因果モデル」と比較、検証するものである。学習内容を重視した動機かどうかで2つにグルーピングされた先行研究結果とは異なり、3つの要因が示された。そのうち、学習することの楽しさや学習している自分に対する感情によって動機づけられた群が体制化方略の使用との有意な関係を示した。高校生を対象とした先行研究と異なり、大学英語教育での学びへの意欲や自尊心を高めることを目指した授業実践の必要性が示唆された。

発表6 英語スピーキングに対する抵抗感を軽減する試み：タスクを用いた英語授業の実践報告

福田 純也(名古屋大学大学院生・日本学術振興会特別研究員)

外国語でのスピーキングは、4技能の中でも最も抵抗が強いものであると言われており、日本における英語授業でも、その抵抗感を下げようとするための様々な試みが行われている。本発表では、習熟度があまり高くなく発話に対する抵抗感が高い学習者を対象に行った、タスクを用いた授業実践と、その実践が英語スピーキングに対する抵抗感に与えた効果について報告する。本実践では、通年授業における半期間で10回のタスクを用いた活動を行った。1単元の授業構成はWillis(1996)に倣い、タスク前活動→メインタスク→言語形式に焦点を当てた活動という流れで、メインタスクでは主にインフォメーションギャップを含むスピーキングタスクを行った。また抵抗感の尺度として磯田(2009)の質問紙を用い、一回目の授業と学期終了後に調査を行った。結果、本実践はスピーキングに対する抵抗感の構成要素のうち、「英語でコミュニケーションを行う能力がないという認知」を軽減したが、「不安」と「コミュニケーションの回避」は介入による変化が見られなかった。また、介入前の英語スピーキングに対しての態度の違いによって、個人間の介入効果に差が見られた。

<第3室>

発表1 ニュージーランド体験型海外研修プログラムの検証：テキストマイニングによる研修日誌の解析

鈴木 薫 (名古屋学芸大学短期大学部)

教育機関が主催する海外研修プログラムは、語学研修やホームステイなどを中心としたプログラムが多くみられるが、近年では海外の地域におけるボランティア活動や交流活動を導入したプログラムが増加し続けている。本研究では、ニュージーランド

のオークランドにて実施された短期大学生を対象とした体験型の海外研修について、学生たちが記録した研修日誌の記述データのテキストマイニングによる解析を試みる。研修プログラムの企画から実施にいたるまでの経緯や、研修プログラムに含まれる各活動について説明する。プログラム全体についての感想や各活動に対するコメントについて分析を行い、キーワードの出現頻度や共起ネットワークから得られる情報によって、学生たちの意識を明らかにする。海外での体験が、英語学習に対する意欲や人間的成長を促す効果について検証する。グローバル人材を育成する取組として、よりよいプログラムにするための改善点についても検討する。

発表2 チャンク情報を考慮した例示型英文書作成支援ツール

戸沢 信晴 (静岡大学)
宮崎 佳典 (静岡大学)
田中 省作 (立命館大学)

我々は、非英語母語話者による技術英文作成支援のため、技術文書が集積された英語技術文献コーパスの中からユーザによる入力英文に近い英文を検索し、例示するツールを開発している。従来の方法では英文を、形態素解析後に適当な基準で類義語でまとめたり、品詞化した n-gram (n 連鎖) で特徴づけ、入力英文とコーパス内の英文の類似度を算出し、それが高い順に提示する。ただ、素直な n-gram では、文内でも遠く離れた不連続な語間の関係や、構文的特徴を類似度に考慮することはできない。そこで本研究では、英文に対して、形態素解析に加え、チャンキングとよばれる解析を施し、浅い構文構造に相当するチャンク構造まで考慮した n-gram を考慮し、英文間の類似度を算出し、例文を提示する方法を提案する。新しい方法と従来の方法との例文検索の実際的な差異については、発表時に説明する。

発表3 スマホ・PC 向け多言語対応語彙教材作成・配信システムの開発

古泉 隆 (名古屋大学)

スマホの保有率が高くなり、PC のみならずスマホに対応した教材のニーズが高まっている。一方、大学における未習外国語(第二外国語)の学習において、基礎的な語彙の学習が重要であると考えられるが、語学教師が独自にスマホに対応した語彙学習教材を作成するのは困難である。そこで、英語のみならず複数の言語に対応し、かつスマホおよびPC で学習可能な語彙学習教材を、容易に作成・配信できるウェブシステムを開発した。システムでは、表計算ソフトで作成した単語リストをコピーして貼り付けるだけでウェブ上に教材が作成される。教材はウェブブラウザでアクセスし、3択早押しクイズ形式など複数の学習モードを備えるほか、テキスト読み上げAPI を利用し英語や複数言語で単語の発音が聞けるようになっている。発表では、本システムおよび試作したフランス語語彙教材の紹介とともに、ウェブアプリにおいてテキスト読み上げ機能を実装する方法にも触れた。

発表4 高校英語の授業用アプリ開発と授業実践：新学習指導要領に対応した開発上の工夫と使用方法

杉山 潔実 (静岡県立藤枝西高等学校)

近年 ICT の教育利用が推奨される一方で、その効果や有効性を疑問視する見解も現れ始めた。この双方の立場を考慮しつつ、英語教育の中にこれを有効な手だてとして導入するための観点や問題点に対し、実践例に基づき考察を加える。1998 年頃より、ビジュアルベーシックやExcel VBA を用いて英語の学習ソフトや授業用ソフトなどを自作してきたが、現在新学習指導要領のコミュニケーション英語 I 用の授業用 iPhone/iPad アプリを開発し、授業に使用している。これらは教師が普通教室で操作し、画面をプロジェクターにより教室前部のスクリーンに投影する、一斉授業の形式で使用するものである。発表は自作の授業用アプリとそれを用いた授業の進め方を紹介しながら、開発と実践に伴う種々の問題点や、ねらいとする効果、アンケートによる生徒からの評価などを主な内容とする。

発表 5 校種間におけるコンピュータ支援語学学習態度の変容：中学生・高校生・大学生を対象とした多母集団の同時分析を用いて

川口 勇作 (名古屋大学大学院)

草薙 邦広 (名古屋大学大学院生・日本学術振興会特別研究員)

本研究では、大学生 (n = 841) を対象に構成した「コンピュータ支援語学学習態度尺度 (以下 CALL 態度尺度, 川口・草薙, 2014)」にて得られた 5 因子 (コンピュータ操作に関する態度, コンピュータ利用の社会的意義に関する態度, コンピュータ支援語学学習の効果に対する態度, Computer-Mediated Communication に関する態度, マルチメディアに関する態度) のモデルが, 中学生 (n = 260) および高校生 (n = 1, 228) においても適合するかを検証した。配置不変モデル, 弱測定不変モデル, 強測定不変モデルの 3 つのモデルを仮定する構造方程式モデリングを用いた多母集団の同時分析を実施した結果, 相対的に最も望ましい適合度が得られた強測定不変モデルが採択され, CALL 態度尺度は中学生・高校生のいずれにおいても大学生におけるモデルと同様の因子構造を持っていることが明らかとなった。この結果に基づき, 校種間における CALL 態度の変容について議論を行う。

発表 6 From building the system to improving pedagogy: Creating a university-wide e-learning system

Adam Jenkins (静岡理工科大学)

Educational improvements can be brought about using ICT to promote e-learning. E-learning systems allow for a greater variety of self-directed learning activities many of which are multimedia rich, and interactive, providing instantaneous feedback to students. However, e-learning systems are not always easily accessible in all contexts. Many universities fail to provide institutional support for teachers who wish to adopt e-learning. In addition, the setting up of an e-learning environment presents several administrative problems that need to be addressed before any educational improvements can be made. In this presentation, I will outline the steps undertaken at the Shizuoka Institute of Science and Technology in the creation of the iLearn@SIST university-wide e-learning system, from server creation and LMS customization to pedagogical training for teachers. Also, I will discuss the effects on students' study routines, examining data from both server logs and questionnaire results.

<第 4 室>

発表 1 Elementary School Children's Musical Aptitude and Productive/Receptive Prosody of English

田畑 恵 (名古屋大学大学院生)

Recently, English rhythmic perception and production have been recognized as essential for native-like pronunciation, but how to achieve them? The first objective of this study is to clarify if musical aptitude, in particular tonal/rhythmic perception and rhythmic short-term memory (STM), are related to receptive/productive prosodic abilities of English. The second objective is to see if musically trained children have a higher musical aptitude than non-trained children. In the study, 53 private elementary school children were given tests on rhythmic STM and productive English prosody individually. They were also given tests on receptive musical aptitude and receptive English prosody in class. The results of the multiple regression analysis showed that either musical perception or rhythmic STM significantly explained English prosodic perception/production, e.g. focus, chunking, and intonation. It was also observed that musically trained children were statistically better in tonal/rhythmic perception. Though further evidence is required, these results indicate that early musical training could help improving the prosodic ability of English.

発表 2 小学校教員を目指す大学生の異文化に対する態度に関する調査：異文化コンピテンスを育成するカリキュラム開発を目指して

石井 英里子 (東海大学)

長田 恵理 (國學院大學)

2013 年『グローバル化に対応した英語教育改革実施計画』が発表された結果, より多くの小学校教員が英語教育に関わる可能性があると言われている。また, 今日の英語教育では, 従来の言語学習に文化に関する学習を取り入れ, 異文化コンピテンスの

育成を教育目標としている。したがって、自ら高い異文化コンピテンスを持ち、かつ、指導者としても子供の異文化コンピテンスを育成できる小学校教員が求められる。一方、多くの初等教育教員養成課程では、現在、外国語活動関連科目は選択科目であり、異文化を取り扱う科目も少ない。小学校教員に求められる異文化コンピテンスとは何か、またその育成にはどのようなトレーニングが必要か、これらのニーズを明らかにする必要がある。本研究では、その基礎的調査として、小学校教員を目指す大学生を対象に質問紙法を用いて実態調査をした。本発表では、この調査から得られた結果と教育的示唆および今後の課題を報告する。

発表 3 小学校英語教育における文字指導の現状と将来の展望

高橋 美由紀 (愛知教育大学)
柳 善和 (名古屋学院大学)

本発表では、小学校英語教育の成果がどれだけ中学校入学時の生徒に定着しているのかを A 県 I 市の中学校で調査した結果をもとに、特に文字指導に焦点をあてて考察する。また特に I 市で取り組んでいる英語教育における小中連携事業との関係で、文字指導の事例をいくつか紹介する。さらにその事例を韓国及び中国の事例とも比較して論じる。

調査の結果からは中学入学時には生徒たちは、教師が読むアルファベットを大文字、小文字ともおおよそ 9 割の生徒が書き取ることが出来る。しかし外来語として定着している英語の単語 (game, ball など) を示してそれらを日本語で書かせるると一部の単語で正答率が落ちる。これは文字と音声の関係についての理解が不十分であるためだと考えられる。文字と音声の関係を理解することは「読むこと」「書くこと」の「文字言語」の基本であるが、そのための第 1 歩となる文字指導の展望についても言及する。

<ミニ講座> Use of technology in British School

Daniel Barker (浜松市 ALT (JET))

When I was a student in primary and secondary school, students studied, along with their core subjects of mathematics, English, science etc, a subject called Information Communication and Technology (ICT). This subject was primarily focused on getting students competent at using computers, starting with skills such as touch-typing, moving on to basic web-design, and finally graduating onto how computer systems are utilised within a business. Whilst there are numerous incarnations of this subject, which vary from school to school, they all cover the content and skills based learning to ensure that students have a foundation in computing in preparation for when they start working.

Much like anything involving technology, this subject area has been continuously evolving since it's inception. Young people are being born into this world of technology and very quickly become accustomed to using it. British schools have been trying to keep pace with this fluid and ever changing world of technology. Before I had finished my time at secondary school, it had already begun to introduce hardware such as interactive whiteboards and touch sensitive screens into the classroom. The latest push by the government is to introduce programming as a core subject to replace ICT. British children from the first year they enter school, with now be learning algorithms along side their times tables.

発表 5 中国の大学における英語教育の現状：中国の大学における英語教育の現状

市川 研 (香川高等専門学校)

日本の英語教育の状況を客観視するためには、近隣国の現状を知ることも重要である。そこで、英語学習者が約 4 億人いるといわれる中華人民共和国の現状を見てみたい。中国政府は国民の総合英語運用能力の養成に向けて改革を行っており、新しいトレーニングモデルの構築、英語課程教学やテキストの改訂など国家戦略に基づく改革を行っている。研究調査・授業観察などの報告より、その実態が分かるが、それらはいわゆるエリート校で行われるもので、中国一般の現状ではない場合が多く、また、大国がゆえに平均像をつかむのは難しいと思われる。本発表ではその点を踏まえ、中国の英語教育、特に大学レベルに焦点を当て、その状況・実態を概観し、特徴をまとめ、現状報告を通してその外国語教育政策の意図を探りたい。また、今まであまり注目されてこなかった英語教育の問題点などを指摘し、日本の英語教育の将来に示唆できる点などを示したい。

発表 6 留学生自身による成長型教材の開発

矢島 邦昭 (仙台高等専門学校)

日本に留学し、高等教育機関で日本語による講義を受講するうえで、義務教育段階で習得しておくべき日本語表現に習熟していないことが、留学生にとって学習上の障害となっている。そこで、書籍ベースの教材を電子化し、タブレット端末を用いることで手軽に学習できる環境を提供した。次に、新しく学習した単語を Web アプリケーションにより、単語、意味、関連するマルチメディアファイルなどをデータベースに登録可能なシステムを開発する。蓄積されたデータベースを先に開発したアプリケーションに対応したフォーマットで出力する。これにより、留学生自身により学習教材が成長していき、学習効率が向上すると考える。

• • • • •

賛助会員展示

- ・チエル株式会社: <http://www.chieru>.
- ・株式会社 JVCケンウッド: <http://www3.jvckenwood.com/pro/avc/product/well/index>.
- ・株式会社成美堂: <http://www.seibido.co.jp>
- ・株式会社教育測定研究所 (CASEC) : <http://casec.evidus.com/index.html>
- ・リアリーイングリッシュ株式会社: <http://www.reallyenglish.co.jp/>
- ・株式会社内田洋行: <http://www.uchida.co.jp>
- ・株式会社桐原書店: <http://www.kirihara.co.jp/>

大会参加のご案内

- 会員の方の参加費は無料です。(ご参加までに年会費をご納入下さい)
- 非会員の方は、当日会員参加費 1,000 円を、受付にてお支払い下さい。
- LET 会員として入会手続きをしていただきますと、当日参加費から無料になります。会員になられますと、LET 全国研究大会、支部研究大会 (年 2 回) での研究発表、紀要への投稿などをして頂くことができます。

支部紀要第 26 号論文投稿受付中

- 今年度の支部紀要 (第 26 号) の研究論文と実践報告投稿申し込み・原稿の締め切りは 2015 年 1 月 10 日です。
- 2013 年または 2014 年の LET 全国大会、支部大会、研究部会に関連する内容の発表をされた支部会員は紀要に投稿することができます。
- 申し込みは中部支部サイトの「各種申し込み」からどうぞ。

LET 中部支部 Web サイト: <http://www.LETChubu.net>
本大会サイト: <http://goo.gl/A9sg7m>